

## 想像力

中桐雅夫/詩

中桐雅夫の反戦の思いを叩きつけるように鋭く問いかけてくる詩に、抑制され時には激しく迫る旋律がつけられている。作曲家外山雄三は、「中桐雅夫の悲しみにも似た憤りの重さは、ほとんど私を打ちのめした」と述べている。右掲「忘れっぽい人」も含む4曲からなる組曲の中の1曲。

たいていの人は  
吸い飲みで水を飲んでから死ぬが  
その暇もなかった子どもたちがいる  
南国の四月の空中に放り出され  
漫画本や人形と一緒にくるくる回って  
地面にたたき付けられた子どもたち  
向こう側の国と  
こちら側の国とがある  
向こう側に妹や弟がいたらと  
想像するのは おかしいか  
肉を食べたことのない子どもたちを  
想像するのはおかしいか  
それほどの想像力も  
君らはもっていないのか  
君らは

## 街を返せ

和合亮一/詩

東日本大震災に伴う福島原発の事故により、ふるさとを捨てざるを得なかった福島の人々。人間としての当たり前の暮らしを奪われ、未だに避難生活が続いている。幸せだった平凡な日々を取り戻したい、と願う人々の怒りと悲しみが胸に響く。

街を返せ 村を返せ  
海を返せ 風を返せ  
チャイムの音 着信の音 投函の音

波を返せ 魚を返せ  
恋を返せ 日差しを返せ  
チャイムの音 着信の音 投函の音

乾杯を返せ 祖母を返せ  
誇りを返せ 福島を返せ  
チャイムの音 着信の音 投函の音

街を返せ 村を返せ  
返せ！返せ！返せ！返せ！返せ！  
返せ！返せ！

## 忘れっぽい人に

中桐雅夫/詩

※ 何度でも尋ねる  
机をこぼしてたたき付けて  
尋ねる

俺達は何のために  
誰のために生きてきたかと  
あらゆるときに  
あらゆる人に聞くぞ  
戦死したやつは何のために  
誰のために死んだのかと

※  
笑うな若者よ  
口もとを歪めるな老人達よ  
この問いには  
言葉では答えられぬかも  
しれないが  
眼を背けるな  
俺達を哀れむな  
どんな絵も音楽も  
答を教えてはくれない  
だろうが  
それなのに何故尋ねるのか  
その理由は簡単だ  
過去がなければ未来も  
ないからだ  
川と川上が関係ないと  
言うのは  
よほどの馬鹿者だ  
古い酒は舌を刺し  
昔の歌は心の傷を一層  
痛ませるが  
俺は俺達とあらゆる  
忘れっぽい人に  
聞き続けるぞ  
※ ~ ※ 繰り返し

## このみち

金子みすゞ/詩

大正末期から昭和のはじめにかけ、全てのものに優しく思いやりがあふれる作品で、「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛された金子みすゞ。しかしその生涯は決して明るいものでなく、わずか 26 歳でこの世を去った。「このみち」は、みんなで明日に向かって一歩を踏み出そうよという、弱くて小さな私たちへの、みすゞからの励ましのメッセージでもある。

このみちのさきには、  
大きな森があろうよ。  
ひとりぼっちの榎よ。  
このみちをゆこうよ。

このみちのさきには、  
大きな海があろうよ。  
はず池のかえろよ、  
このみちをゆこうよ。

## 降りつむ

永瀬清子/詩

アジア・太平洋戦争の敗戦から3年、詩人永瀬清子が戦争で全てを失い過酷な日々を生きる人々に胸を痛め、心を寄せ励まそうとした作品。金沢育ちの清子には、雪はきびしくも懐かしく優しいものであった。

かなしみの国に雪が降りつむ  
かなしみを糧として生きよと  
雪が降りつむ  
失いつくしたものの上に  
雪が降りつむ  
その山河の上に  
そのうすいシャツの上に  
そのみなし子のみだれた  
頭髪の上に  
四方の潮騒いよいよ高く  
雪が降りつむ  
夜も昼もなく  
長いかなしみの音楽のごとく  
哭きさけびの声を鎮めよと  
雪が降りつむ  
ひよどりや狐の巣にこもることく  
かなしみにこもれと  
地に強い草の葉の冬を越すごとく  
冬を越せよと  
その下から  
やがてよき春の立ちあがれと  
雪が降りつむ  
無限にふかい空から  
しずかにしずかに  
非情のやさしさをもって  
雪が降りつむ  
かなしみの国に雪が降りつむ

## 歓びのナーダム

巴音吉日嘎拉/詞 本並美德/日本語詞

モンゴル各地で行われる国民のお祭りであるナーダム。最大のは7月の革命記念日に、ウランバートルで3日間開催され、相撲、競馬、弓射等が行われる。モンゴル民族の一体感を共有する祭でもある。

ナーダムだ ナーダムだ  
モンゴルの夏は  
ナーダムに燃えるよ ホッホー  
男も女も 互いに会える  
ナーダムの祭りだよ ホッホー  
ホッホホー 胸は躍るよ  
ナーダム  
広い草原は 山あり谷あり  
荒馬の背に若者  
空駆け 川飛び越え  
シヨンラ シヨンラ  
ピャオリヤン ピャオリヤン  
シヨンラ シヨンラ  
ピャオリヤン ピャオリヤン  
ハイ！ハイ！ハイ！・・・

ナーダムだ ナーダムだ  
モンゴルの夏は  
ナーダムに燃えるよ ホッホー  
男も女も 恋する季節だ  
ナーダムの祭りだよ ホッホー  
ホッホホー 胸は躍るよ  
ナーダム  
広い草原は あふれる人並み  
真中に向き合う 二人の若者  
ハッケヨイ ハッケヨイ  
ピャオリヤン ピャオリヤン  
のこった のこった  
ピャオリヤン ピャオリヤン  
ハイ！ハイ！ハイ！・・・

豊かなふるさと  
全てのものたちの 幸せ続けと  
ナーダムの祭りを  
歓び讃えよ 歓び歌えよ  
歌おう 歌おう！アー  
（1 番は省略、  
2 番と3 番を歌います）



荒馬に跨って走る若者たち

## ヴォルガの歌

オストーロフ/詞 合唱団白樺/訳詞

昔から「母なるヴォルガ」と、ロシアの人々に親しまれてきたヴォルガ川。未来への躍進の息吹を乗せて、豊かに流れ続けるヴォルガへの愛情と尊敬を歌っている。

オイ ヴォルガよヴォルガ  
豊かな河 ふるさとの河よ  
ロシアの友 広き流れ 歴史を秘めつつ  
この地をラージンは歩み  
チャパエフは彼の地をめぐる  
オイ ヴォルガよヴォルガ  
楽しき時 悲しき時にも  
わがロシアの友

オイ ヴォルガよヴォルガ  
見果てぬ河 遥けき流れよ  
さざなみにも 影を映し 星は輝きぬ  
われらの誇り 望みの火  
灰色の時は去りぬ  
オイ ヴォルガよヴォルガ  
オイ ヴォルガよヴォルガ  
大いなる流れ 母なるヴォルガよ  
（2 番は省略、1 番と3 番を歌います）

## 仕事の歌

ロシア革命歌

ロシアの帝政末期から革命期、波止場人足がろくろの引き綱を巻きながら歌った歌が元歌。原題「Дубинька」は綱を巻くろくろの軸木で、労働の道具であり庄政に立ち上がった民衆の武器ともなった。抑圧と搾取に対する怒りが歌われていたので、当時の政府はこの歌を歌うのを禁止したが止められなかった。今回は日本でよく歌われている歌詞・曲でなく、ロシアのバス歌手シャリアピンが歌っていたものを元にした曲で演奏する。

Много песен слыхал я в родной стороне,  
ムノーガ ビューセン スレイハール ヤ ヴラドノイ スタラニュー  
В них про радость, про горе мне пели,  
フ ニフ フラ ラーダスチ フラゴーリエ ムネ ビューリ  
Но из песен одна в память врезалась мне—  
ノ イス ビューセン アドナ フ バーミヤチ ヴリエーザラシムニエ  
Эта песня рабочей артели.  
エータ ビュースニヤ ラボーチエイ アルチューリ

(Привет) Эх, дубиньшка, ухнем!  
エーフ ドゥビヌシカ ウーフニエム

Эх, зелёная, сама пойдё!  
エーフゼリョーナヤ サマー バイジョート

Подёрнем, подёрнем  
パジョールニエム パジョールニエム

Да ухнем!  
ダ ウーフニエム

親は倒れ、死の間際に  
息子に残すものは  
貧しい暮らし辛い運命  
悲しい仕事の歌  
※ 繰り返し

夜の闇もやがては去り  
苦しむ民は目覚め  
皇帝どもを倒すときに  
歌わん仕事の歌  
※ 繰り返し

私は生まれ故郷で多くの歌を聴いた  
喜びや悲しみの歌を耳にした  
だが、その中で思い出に刻み込まれた一つの歌がある  
それは労働者の仲間たちの歌だ  
（繰り返し） おお 樫の木よ 持ちあがれよ  
おお 緑の葉のついた棒が動きだす  
引っ張るぞ 引っ張るぞ それ！

## ルースカエ・ポーリエ

ロシアの曠野

Л. Гопф/詞 坂山やす子/訳詞

1968年のロシア映画「予期せぬ出来事」の挿入歌。美しい旋律と詩で評判となり、映画未公開だった日本でも歌詞が翻訳された。作曲家フレンケリは、ダークダックスの歌で人気を博した「鶴」<ヒロシマでの印象をモチーフにした叙情的歌曲>の作者でもある。

ポーリエ  
ルースカエ ポーリエ  
月光り 雪すさぶ  
喜びも悲しみも  
永久に心深く  
ルースカエ ポーリエ  
ルースカエ ポーリエ  
果てしない曠野 はるか  
輝けるわが青春  
おまえは私の友

※ 海原にも たとえられぬ  
広きわが曠野 風は凍る  
ここは祖国 私の国  
広きわが曠野 私の曠野

ポーリエ  
ルースカエ ポーリエ  
久しく街にいても  
草の香り春の豪雨  
懐かしく心焦がす  
ルースカエ ポーリエ  
ルースカエ ポーリエ  
希望にともに生きる  
信じ合い生きてゆく  
曇り日も希望見つめ  
※ 繰り返し

ポーリエ  
ルースカエ ポーリエ

## フィンランディア

関 忠亮/詞

フィンランドの作曲家シベリウスの交響詩「フィンランディア」から、1941年に歌詞がつけられ、シベリウス本人が合唱用に編曲した作品である。当時スターリンが支配するソ連の露骨な侵略で、国家存亡の危機にあったフィンランドの人々を奮い立たせる歌となった。現在もフィンランドの第2の国歌として広く歌われている。

七つの海越え ひびけ  
遥かの国の人へ  
故郷の野に 歌える  
私の希望こそ  
世界の国まで同じ  
平和へのうたごえ

青き空の色 深く  
木立も草も光る  
わが祖国よ 若者よ  
他国の山もまた  
同じ光に映えるを  
ともに願い 歌え